

## 「Giant Step」

## 宮城県志津川高等学校

### 1. 活動の概要

- 1) 戸倉地区海洋青少年自然の家（約5日間）
  - ・たき火、飯ごうを使ってのご飯炊き、テントの組み立て
  - ・看護師の回診、血圧測定、カウンセリング、ヘリコプターへの送迎のお手伝い
  - ・物資の運搬
  - \*役職 医療班
- 2) 志津川ベイサイドアリーナ（約1ヶ月）
  - ・物資の運搬、食事の準備、調理など
  - \*役職 給食班 副班長

### 2. 活動の成果等（生徒の作文より）

震災直後から約1ヶ月の避難所生活の中で、特に「食」に関わるが多かった。物資の中から献立を考え、提供することが給食班の役割だった。毎日700人近くの食事を提供した。朝起きたらすぐに朝食を並べ、誘導の準備をする。それが終わると昼食の準備に移り、物資の中から食材を探し、配置。その後は一番時間をかける夕食の準備。夕食が終わると、班長やシェフと一緒に、残っている野菜を確認し、次の日の朝食の準備をする。それが終わる頃には消灯時間の9時を過ぎている。

このように、とにかく忙しく休む間もない給食班を続けた理由は、みんなを笑顔にできるから。目を見て笑顔で「どうぞ」とパンや缶詰を渡すと、「ありがとね」とみんな笑顔で返してくれる。それがとてもうれしかった。避難生活を支えてくれたのは、食事を通しての笑顔の会話だったと思う。

私は中学生の頃から町のボランティアサークルに付属し「ジュニアリーダー」として活動してきた。その活動を通して、ボランティアで心がけておくべきことを知った。それは、「人を想うこと」「人を笑顔にすること」「繰り返し行うこと」である。誰かのために働くのがボランティアであ

り、決して自己満足で終わってはいけない。誰かのためになれたかどうかは、笑顔で確認できる。心の底からの笑顔を見ることができたら、そこでボランティアができたと思うのである。さらに、ボランティアは継続しなければ意味がない。一回大きなことをするよりも、小さくても何回も繰り返し行うほうが、相手の印象に残るし、成果も大きい。なぜなら、何度も同じ場所に行くと顔を覚えてもらえ、親近感が強まり、違う場所でも話かけてもらえる、つまり、「繋がる」からだ。私は小中学生とふれあう中で、人に覚えてもらえることほど嬉しいものはないと感じた。結果的に、ボランティアをすることで、自分自身も笑顔になれた。

東日本大震災におけるボランティアでは、より笑顔を心がけ、自分のモットーである「周りの人を笑顔に」を常に考えながら行動した。挨拶するとき、すれ違うとき、日常の何気ない時間の中にたくさんの笑顔を咲かせることが、復興への第一歩だと考えたからだ。

そして今、あの日々の笑顔は、大きな一歩へと繋がろうとしている。

大人たちの、町のために一生懸命働く背中、疲れを感じさせない笑顔を見て、若者たちが「次は私たちが！」と動き始めている。笑顔を通して、次の世代へ復興の意識が伝わったのはとても大きな一歩だと私は思う。そして、未来を担う若者の先頭に立ち、東北の復興に携わりたいと、私は強く思う。

